

日刊 勤労千葉

84. 6. 20

No. 1670

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）五三五〇六（公衆）〇四七二（22）七二〇七

言を許さない

6・24

トマホーク阻止・中曽根打倒 明治公園集多総決起

6月24日、総評・社会党系、反安保護憲連合の呼びかけによる「6・24トマホーク配備阻止中央集会」が開催される。

過日、現地横須賀で開かれた「6・3トマホーク阻止関東ブロック集会」では、労働者・住民団体など一六〇〇〇名が結集し、横須賀米軍基地に向けて怒りの抗議デモをたたきつけた。こうしたわれわれの怒りを嘲けるように、翌、六月四日、反動・中曽根は「核兵器を持つている国は、それを使うのは勝手である」と発言し、被爆国である日本労働者・人民に「再び広島・長崎をくり返してもかまわない」と公言し、自らも核武装する野望を露骨に表明している。このように、われわれの怒りの反トマホーク闘争をふみにじる中曽根をどうして許すことができようか。全ての怒りを結集して6・24明治公園に総決起しよう。

中曽根の恐るべき攻撃

いま、中曽根内閣は、世界のどの帝国主義より凶暴な超反動ぶりを露骨にしている。「戦後の総決算」攻撃をなすりかまわず全面開花させてきている。このことは、戦後の労働者・人民の生活と権利を暴力的に破壊してもかまわないという攻撃に他ならず、「帝国主義が生きてのびるためには、その犠牲に労働者・人民は死んでもかまわない」という恐るべき攻撃である。

敵は、この「総決算」の焦点に三里塚二期強行とならんで、国鉄労働運動破壊をすえ、全マスコミを総動員し、国鉄監理委員会を発足させ「国鉄再建」こそが「国家再建」への唯一の道であるかのペテンと恫喝で矢継ぎ早の臨調・行革攻撃をかけてきている。彼らは、ついに「一時帰休制の導入」「出向」「退職勧奨」を三本柱とする「過員」攻撃と称する生首切り攻撃をかけてきたのだ。全国全職場からの総力決起で断固これをうちくだかなければならない。

自民党との共闘を唱う

動労「本部」革マル

このようなときに、日本の労働運動は、極めて危機的な状況に陥っている。動労「本部」革マルは、これらの攻撃に完全に屈服し「闘ってはならない」「もつと働こう」「労使一体で国鉄を再建しよう」と組合員を「オルグ」し、実は動労内革マルだけが当局の手先として生きのびることを目的としている。そして、ついに今日、彼らは、「自民党との共闘」を方針化するまでに至っている。

動労「本部」革マルは東京地本委員長・松崎は、「反戦・反核」というお題目をベテンのにかかえていさえすれば、自民党や経営者団体と一体となつて経営参加していいんだ、とまで、明言している。（第一二三回中央委員会での発言）

ここまで言いいきる動労「本部」革マルに、階級闘争を語る資格は微塵もない。怒りをもって、動労「本部」革マルを粉碎・一掃しなくてはならない。

三里塚で反動を打ち破れ

では、日本労働運動は、中曽根の反動の前にこのまま総屈服・総転向を続け、なすすべもないのか？

否そうではない。これらの攻撃のなかで、三里塚闘争が唯一、中曽根の反動と対決し、非妥協・非転向で、十八年間も実力で闘いぬいている。だからこそ、敵は、国鉄労働運動破壊軍事大国化・戦争体制づくりのための「総決算」攻撃の最大の焦点に「今秋二期強行」をすえて襲いかかってくるのだ。「三里塚・国鉄」決戦は、中曽根との真正面からの激突の決戦である。それ故にわれわれは、全力をふりしぼりなんとしても三里塚今秋決戦の勝利をかちとることである。

反戦・反核の最大の砦、三里塚で勝たねばならないし、勝てる。

われわれは、6・24反トマホーク中央集会に結集するであろう数万の労働者・人民に「三里塚を闘う労働運動」こそが、反動中曽根打倒の最も現実的な道であることを告げ知らせ、全労働者・人民と共に闘うことを訴えるために、圧倒的結集をもって堂々と登場しようではないか。